

年刊現代詩集

'84下半期



芸風書院

△あとがき▽

年刊現代詩集77は、全国各地の詩誌から推薦された現代詩の年刊アンソロジーとして日本で最初のものでした。以来9年、今回が13冊目になります。その間、昭和詩の万葉にふさわしい普遍性と将来性のある作品を求め続けてきました。掲載された作品は、すでに四五〇〇篇に達しています。

私達は今後、現代詩というせまいジャンルではなく、現代を真摯に生きる人達の現在の詩という広い意味で、この年刊現代詩集を刊行していきたいと思っております。

既成の詩壇ジャーナリズムに左右されずに秀れた作品を生み出している詩人は、全国に数多くおられます。そういった詩人を一人でも多く紹介していくのも私達の仕事です。

今後とも一層のご支援をお願いいたします。

年刊現代詩集編集委員会

年刊現代詩集 '84 (下)

1984年12月20日 発行

¥ 3,000

編 者 年刊現代詩集編集委員会

発行者 萩 原 勉 夫

発行所 株式会社芸風書院

年刊現代詩集編集委員会

東京都文京区本郷 1-15-4 文京尚学ビル

電話 (03) 814-9591 (代)

振替 東京 0-47841

表紙デザイン・さえきこと レイアウト・伊奈克平 印刷・上野印刷所

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

年刊現代詩集'84(下)

—全國主要詩誌代表詩人集—

芸 風 書 院

年刊現代詩集新人賞

受賞作品及び受賞者

第一回新人賞

入選 「人魚」(年刊77所載)

山本美代子

神戸市。「日本詩人クラブ」「地球」「たうろす」所屬。

「河太郎文」(年刊78所載)

廣岡昌子

交野市。「大阪現代詩人会」「交野詩話会」所屬。

佳作 「嘔吐」(年刊77所載)

小松弘愛

高知市。「日本詩人クラブ」「兆」所屬。

「風」(年刊78所載)

木下幸江

西宮市。

「ゼロの季節」(年刊77所載)

高橋和子

神奈川県山北町。「作家社」所屬。

第二回新人賞

入選 「女犯不動」(年刊80上半期所載)

打田早苗

山形市。「東北詩人」所屬。

「噂の耳」(年刊80上半期所載)

鈴木豊志夫

千葉市。「千葉現代詩人会」「光芒」所屬。

「月と魚と女たち」(年刊79所載)

中野博子

大阪府。文芸誌「作家」所屬。

佳作 「鳥」(年刊80上半期所載)

小松弘愛

高知市。「日本詩人クラブ」「兆」所屬。

「ひがん花幻想」(年刊79所載)

鈴木操

前橋市。「芸象文学会」所屬。

「不良志願」(年刊80上半期所載)

掛布知伸

名古屋市。「市民詩集の会」所屬。

「私の夏は」(年刊79所載)

たかとう匡子

神戸市。「大阪現代詩人会」「第三紀層」

「むとす」所屬。

第三回新人賞

入選 「詩人偽証」(年刊81下半期所載)

そらやまたろう

宇都宮市。「栃木県詩人協会」「橋」所屬。

「蜘蛛の糸」(年刊81下半期所載)

横さわ子

福島市。「地球」「あぶくま詩の会」「北斗

の会」所屬。

佳作 「裏町どしらそふぁみれど」(年刊81上半期所

載)

掛布知伸

名古屋市。「市民詩集の会」所屬。

「水域から」(年刊81上半期所載)

岩佐なを

横浜市。「地球」「射撃祭」所屬。

「アクリル」(年刊81上半期所載)

紫圭子

愛知県鳳来町。「孔雀船」「原始林」所屬。

「ほたる火」(年刊81上半期所載)

原桐子

常陸太田市。「日本詩人クラブ」「白亜紀」

「翼」所屬。

「沈黙」(年刊81下半期所載)

若林光江

栃木県南河内町。「日本詩人クラブ」所屬。

第四回新人賞

入選 「ストーン・サークル」(年刊82上半期所載)

紫圭子

新城市。「孔雀船」「原始林」所屬。

佳作 「ぶち猫のドジ幽閉の五日間」(年刊82下半期

所載)

えぬ・まさたか

兵庫県社町。「火皿」所屬。

「サンクチュアリー聖域」(年刊82上半期所載)

坂本登美

福岡市。「汎芸神」所屬。

「飛行論」(年刊82上半期所載)

綾部健二

宇都宮市。「橋」「地球」所属。

「落花」(年刊82下半期所載)

神崎崇

宮城県柴田町。「像」所属。

「あなたと私の穴について」(年刊82上半期所載)

渡辺真理子

船橋市。「光芒」所属。

「仮構の部屋」(年刊82下半期所載)

山田隆昭

東京江東区。「地平線」「風」所属。

第五回新人賞

入選 「ザリガニ飼う後めたさは」(年刊83上半期所載)

渡辺真理子

船橋市。「光芒」所属。

「鬼を言う」(年刊83上半期所載)

山田隆昭

佳作

東京都江東区。「地平線」「風」所属。

「少年マサ鬼面に会う」(年刊83上半期所載)

えぬ・まさたか

兵庫県社町。「火皿」所属。

「夢景」(年刊83下半期所載)

渡辺卓爾

厚木市。「直立猿人」所属。

「そんな時が……」(年刊83下半期所載)

富沢宏子

東京都足立区。「青い花」「現代詩研究」所

属。

「棒を捨てた男の話」(年刊83下半期所載)

川島洋

千葉市。「光芒」同人。

「しご」(年刊83上半期所載)

川口泰子

川口市。「地平線」所属。

年刊現代詩集

'84

(下)

目次

非情
梅雨
火炎土器
壁
手乗り文鳥
泣き方の研究
白骨
秩父行
八月十五日
ぼくの前に
静物の記憶
奥武蔵・秋色
流星
離騒
淡光
帽子
白画像Ⅱ

青木 守…12
青木 秀夫…12
青山 隆弘…13
赤松 詩朗…14
秋 太郎…15
秋山 末雄…17
葦原 中彦…18
天路悠一郎…19
天野 行雄…22
綾部 榎城…22
綾部 健二…24
新井 均二…25
安藤 雅郎…26
安藤 賢一…27
伊藤 勲…28
伊藤眞理子…29
伊賀上 茂…30

遅れた花
転ぶ
少女よ何故に
祭と蝶
私が解らずにいる私
かお
櫛形を離るるの詩
告発するうた
打つ
行方も知らぬ水引き地藏
おふくろさん
自転車
賢者と愚者と
小惑星
東金線
願い
おむつを縫う
今日からの涯
給料のもらえる日
ある賀状

五十嵐眞一…31
石川まさじ…31
石川三恵子…33
石川 宏…33
猪瀬 清子…34
今村 芳子…36
宇野 雅詮…37
植木肖太郎…39
梅田 智江…40
えぬ・まさたか…42
江田恵美子…43
江良亜来子…44
遠藤 富子…45
小笠原昌子…46
小倉 慶子…47
大池 満…48
大賀 富子…49
大國キヨ子…49
大久保友博…50
大久保紀次…51

蜻蛉と蟻
 響き
 樹蔭のダンス
 舞
 小春日和
 まり子かんのん
 誕生日に
 水辺
 あわれなマンガース
 閉じる
 酒の色
 時間の旅
 訪れ
 惑星
 残響
 裏通り
 雨
 春の掌
 水の場所
 野郎ども

大越 龍栄…52
 大路今日子…53
 大重 辰雄…54
 大田 倭子…55
 大滝 修一…56
 大谷 従二…57
 大貫 喜也…58
 大野 勝也…59
 大野理維子…60
 大橋三千代…60
 大広 行雄…61
 鳳 真治…62
 岡本美代子…63
 岡本 守三…64
 奥 重機…65
 奥田 晴義…66
 賀川 幸夫…66
 香山 雅代…68
 貝原 昭…69
 掛布 知伸…71

彼岸とは
 網目模様
 聖と賤
 たそがれ街・教えうた
 泊まり船
 芋こじ
 秋桜花
 古物
 越前 おきよう箸
 そのひと
 川
 スカイラーク
 天紅
 黙示録
 明日の時
 音
 母原病
 広島から来たゴキブリ
 廃村
 生命の命題

笠原 昇…72
 片山 操子…73
 勝又 利賢…74
 門倉 実…75
 金子 利晃…77
 金子 豊…77
 紙谷美智子…79
 川井 照司…80
 川上明日夫…82
 川村 洋一…83
 川本 洋子…83
 河井 博信…84
 河上 鴨…85
 神庭 泰…85
 神部 亮…87
 木村徳兵衛…89
 鬼頭 和美…90
 北原 政吉…91
 北村 留男…92
 久保木宗一…93

塔
野生(二)
信号は赤
あばく とすれば
夜の道で
こん畜生！ 生きてるぜ
西湖
いのりの谷
オブジェの墜ちるとき
群青の山
鳥と風景
病棟日誌
標本室
黒い初夢
聖獣墓地 その(一)
広間
心うかれて
掌の河沙
病床つれづれ
軌跡

草薙 定… 94
倉橋 良子… 96
倉持 伊平… 97
栗和 実… 98
黒木 清次… 99
黒木 松男… 100
黒羽 英二… 102
小林 きく… 103
小林 実… 104
小山 透… 105
合田 曠… 106
佐々木寿信… 107
嵯峨 潤三… 108
斎田 朋雄… 110
坂本 登美… 111
阪上新治郎… 112
澤野 春美… 113
山家 樹風… 114
寒川 靖子… 114
清水 祐子… 116

言葉
親友
ひとひとりいない仕事場の
風、かぜかぜ
カタチ
往還
街のひずみ
冬 '84
呑みこんだ森
階
隻詩断章II
また八月が
近所の歌
眼底図譜
乾燥地帯
米をとぐ
タンカー
冗談
乙姫さま
湯返し

篠原 雅雄… 117
志満多美知男… 118
白石 羊子… 119
末繁 博一… 119
菅原 優子… 120
杉谷 昭人… 121
杉原 節子… 122
杉山 満夫… 123
鈴木美枝子… 123
鈴木 操… 124
関口 修太… 126
そらやま・たろう… 127
たなかけんじ… 128
田中規久雄… 129
田中 聖子… 130
田中 保… 131
田中 正名… 131
田中 理助… 132
田村 旭… 133
高島 修和… 135

戦慄

動物三題

流砂の声

夏の日に

夜三題
ブラス昼

ただ 貝でしかなかっただけの

高原の娘と百合の花

サヨウナラ

終りのいろは

父と助役

俺の冬

捨てられてゆくものの歌

ラーメンの詩

春

街

御幸ヶ浜の出会い

惜花

小太郎

待つ

扉のむこうで

高島 正好…136

高杉 健一…137

高橋 和子…139

高橋 國雄…141

高橋 保雄…141

高原志乃婦…142

高村左文郎…143

高山 悦子…144

谷内 武司…145

谷口 謙…146

千明 政夫…148

地引 貧…149

近村美智子…150

司 真…151

月野 浩二…152

辻本 耀三…152

綱川 タツ…154

角田 秀夫…155

寺井 喜子…156

得居 俊子…157

孤独

春を呼ぶ腕

季節 (1)

雨情の川

私の中の風

喫茶店にて

自殺論

病棟生物学

P T A 役員選出

愛

大いなるものへ

カラス挽歌

湾

久しく会わない女へ

おもいで

ハンミョウ

道

たんぽぽの花

子供たちの夜の祭

なみだ

島 洋…158

富沢 智…158

富沢 宏子…159

豊田 大明…160

鳥居三千秋…161

名護 宏英…162

名古屋哲夫…164

内藤 道雄…165

永井 君子…166

永井 正春…167

中田 雅子…169

中原眞理夫…170

中村 吾郎…171

南家 久光…172

二階堂修一郎…174

根来真知子…174

野島 茂…175

野村 道子…176

波多野マリコ…177

長谷川匡一…178

鳥が襲う

闇に立つ 6

青松多寿色

戒壇

母よ

森のコレスポンドダンス

女

北辺のまち

ある夜

UFO

還らざるものへ

兄煩惱

ブルースを踊るのは

一枚の赤茶けた写真

遍在し、旋回するエネルギーのさなかの

甲殻類

亥年

一喜一憂

潟上温泉エレジー

メキシコシティ(2)

長谷川 潔…178

林 弘子…179

日置百合子…181

東山 円照…182

匹見 太郎…183

府内 一夫…185

福井富士子…186

福田嘉一郎…187

藤 外美子…187

藤岡 正幸…188

藤澤 弘芳…189

藤本なをよし…190

本郷 和枝…191

本庄 栄二…192

前野りえ…194

榎 さわ子…195

増田良太郎…195

町田 久…196

松井 赤葉…198

松下のりを…199

昭和一と桁の属と鳴る譜

歩行者橋

菜園にて

挿話

我は修羅

ワカメの切れはし

波

まわりの木

沖繩よ

夏の道、謎の家

雫

シヨパンの音

海

皿摘み

雪寺

山茶花

叔母シエさん

影絵

春蟬の悲愴

夕陽よ

松村 俊幸…200

松本 一哉…201

松本 宣子…203

丸山 勝久…204

三浦 令…204

三方 克…205

御木 茂世…206

美村 幹…207

深山 鏡子…208

水野ひかる…209

水野 正巳…210

瑞田 任…211

武藤 重勝…212

紫 圭子…213

森 ちふく…214

森田 栄子…215

山内 透…216

山口 和士…217

山崎 昇…219

山下 延夫…220

大師像
 帰路
 逆説的構図
 ピエロ狩り
 詩業三種
 八月の月を前に
 古都キエフ
 空の食卓
 噴水
 夏
 経過
 空
 真犯人の声
 詩人論
 森の美少女
 牡丹寺
 緑色したガラス玉
 パンザイ
 誕生
 分水嶺

山田 寂雀…220
 山田 隆昭…222
 山野 一男…222
 山本 茂…224
 山本 四十…225
 雪原 立樹…226
 世川 心子…228
 横堀小夜子…230
 横森 三雄…230
 吉井富美江…231
 吉田 幸子…232
 吉田 ノブ…233
 吉田 博哉…234
 和気 勇雄…236
 和田 佐敏…237
 若林 節…238
 若林 光江…239
 渡辺 岳風…241
 渡辺 卓爾…241
 渡辺 勉…243

未明は黄昏に似て
 夕暮れの海
 漁火
 —資料—

年刊現代詩集'77-'84 (上)への参加者
 個人詩集紹介
 △あとがき▽

渡辺真理子…244
 渡辺みち子…245
 渡辺 洋…246

作

品

例言

一、本詩集は全国各地の同人誌・詩誌・文芸誌の支持と協力のもとに完成された各地の代表詩人によるアンソロジーで、掲載作品は一九八三年一月から一九八四年六月末日までに制作されたものです。

一、寄せられた一〇〇〇余篇の中から二二〇篇を選んで集録しました。作品は原則として作者名（筆名）の五十音順。
（ ）は作者在住の都道府県。末尾の太字は所属団体、所属同人誌名です。

一、同人誌・詩誌・文芸誌の主宰者による推薦作品は原則としてすべて掲載されております。

一、第六回年刊現代詩集新人賞は本詩集及び84年上半期版の中から選出されます。発表は一九八五年三月上旬。本人通知、主要新聞紙上及び芸風ジャーナル等。（入選・賞状、及び賞金総額二〇万円、佳作・賞状及び記念品）

非情

青木

守（愛知）

あなたは

左目に眼帯をして

八月にぼくを産んだと笑った

その八月は

水のように石を砕きながら流れ

闇の沃野には無数の鳥がうずくまっていた

幸福も不幸も

ただ一つしかないのさ

（ぼくは霧の方へ向って走った）

すると

月影の中から現われたあなたは

突然

夜の川を魚のように泳ぎはじめた

梅雨（忍びのうた・その8）

青木秀夫（埼玉）

忍びは 梅雨が好きだ

もやもやけむる 白い梅雨が好きだ

煙霧の底で

白装束は 走り跳び仕掛け欺き

死闘を繰り返す

これぞ 極意！

忍びは 梅雨が好きだ

鋼鉄の鞘に ミクロの水滴を

隙間なく刻む あの緻密さ軽快さが

何とも云えない

柳の垂れた緑や 白詰草に

泣き濡れて しがみつく

春雨なんかより

よっぽど 男らしい

いつやむとも告げずに 突如

夏の陽光を 突き刺す あ

切れ味 あ

晴れ間 にこそ

鮮烈な男の魅力を感じる

……

……

“お菓 買って来たワ…”

黒髪に 梅雨の点点が虹をかける

少女は ためらい……濡れた帯を解く

茜 蘇芳 白 白 紺

牡丹 萌黄 白 白 紺

抱かれた子狐が鼻をヒクヒクさせる

“お菓 買って来たのに……”

目もくらむ 木洩れ日が

藪の底を 突き刺す

少女も狐も 不意に消えた

“コン” とないたのは

どっち だろう……?

……

……

傷口の 疼く季節が来た

それでも 忍びは

梅雨が好きだ

“コン” となくところが

たまらなく いい――

火炎土器

青山 隆 弘（愛知）

闇の中で

突如

大地は歓喜し

踊り狂い

山は紅蓮の炎を噴き

樹々を焼き尽くし

流れる溶岩は

縄文びとや動物たちを呑み

文学館

その悲鳴を

沸騰する海へと押し流した

地の神と

山の神と

海の神が

いつせいに

お祭りをはじめたのだ

神様たちは悪乗りしすぎて

生物たちを跡形もなく亡ぼしたのだ

その恐怖は

縄文びとの魂に深く刻み込まれ

血から血へとうけつがれ

何百年もの刻が流れた

そしてある日

風にもまれて自然に燃え出した木々を見て

血の中に眠っていた遠い記憶の痕跡が

燃え上る炎のように甦った

彼は炎への呪いをこめて炎の形の器を作り

恐怖の記憶を隆線文に封じ込み

焼き亡ぼそうと神の仕事をまねたのだが

縄目模様からはみ出した恐怖の形骸は

四つに裂けて焼き固まったまま

なおも燃え上ろうとする意志は

天を指向して立ちあがる

もがけばもがくほど

更にきびしく喰いこむ呪縛の中で

なおも激しく燃え上る

あなたへの想いのように

壁

赤松詩朗（愛媛）

涙はすでに渴れていた
右往左往している自分がむしろ滑稽だった

市民詩集

目の前には

越えることも壊すことも出来ない

かつて観たこともない大きな壁が

どこまでも続いていた

どうすればいいのか解らなかった

自分が自分でないような

そんな気がした

心身ともに疲れ果てて

地に崩れ倒れば

土は暖かく体は楽だった

土の暖かさが頬から体中に拡がって

溶けていくような……

薄らいでいく意識の中で

力が欲しい”

と思った

渴れたはずの涙が雫れ落ちた

鮮やかな

紅い涙だった。

手乗り文鳥

秋 太郎（栃木）

この小さなかしこい小鳥が運命を持っている

手の甲に止り ちよっと首をかしげる

すると 運命が大きく振える

いったい この鳥はどこから運命を運んできたのか

知ろうとする そのすきまにまた部屋を飛びまわる

そのたびに運命はひとつの悲しみを知らされる

もう決まった 小鳥の世界にあるものは いったいなん

なのだろうか

私の肩にとまり 小声で鳴く 小鳥をそっと指にとまら

せる

すると 小鳥は首を左右にふる

なんと 自然ななりゆきではないか 運命がそこに置かれ